104

寛永諸家譜

藤原氏已四冊之内三

利仁流

内閣文庫
番號 和 20199
冊數 186(104)
函號 特 76 1

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

遠山　西山

坂藤

寛永法家系図伝

巳三　小家

藤原氏

利仁流

遠山

加茂次郎景廉が子景朝遠山と号す

其子孫美濃国に住す

浅草文庫

某

左衛門尉　美濃国岩村城に住す

某

左近　美濃国苗木城に住せ
病死して子なきゆへ織田信長の
命にしたがひ親族なるによりて
友勝にあとをつがせ坂城に住せ

友勝

右衛門佐　法名嘉雲

しところ美濃国飯場城に住せし
が信長の命によりて居を苗木
城にうつし飯場城をば嫡子友忠
にゆづる

友忠

久兵衛尉
飯場城に住せ嫡子友信に坂城を
ゆづりて友忠を同国阿手羅城に住せ

友信

右兼つ伝
飯塚城より信長逆心よりて伝長
乃ことを誅せらるゝ友宣が庶兄なるを

友宣

次郎兵衛尉　母は伝丸姪女
甲列軍勢阿波羅城をせめしこと
十九歳にして討死

友政

三郎兵衛尉　母は久兵衛尉の妹なり
同前
信長より信列本曽城をさゝへのこゝろ
父友忠をもびき友宣と父子三人を
ちくに阿波羅城より居せしむ
甲列の軍勢阿波羅城をせめるとゝ
こゝにかくて城をほりをこしてもつて
ゞかし此こゝにて友宣討死を受友勝

を苗木城にをひく病死のゝちゆへ
に伝兵衛殿父乃居城苗木を
治国父友忠ともに山城に移
住す
天正十一年豊臣秀吉ゆゑ森武蔵守
長一が麾下に属すべきに吉あるとと
いへども友忠友政ともこゝばゝゆへ
長一が家人幸田とゆゑものと武拍
こして苗木城へよせ来るのゆへ

友忠友政半途にかむかひ幸田が士
卒をもつて討捕幸田はもとより
ち敗北せしゆへに長一みづから
軍勢をひきいゝ苗木城をとりこむ
といへども父子城を守衛に
よりて強小ハ長一引もつてそのほ
和睦ありて城を長一ゆるすこと
それゝ人質別演松よりこと
東照大権現に敗北を友忠を責沢

小大膳亮屬せられ故家よりして
病死及改易を演松堂後列よりて
まで伝へ来りし
同十八年相列小田原落城の時
大檀現の鉤命を拝し奉り武蔵大浦
より屬し上列鈴林に住し
芳春寺より上板京橋殿逆乱の別
大檀現下野国小山小山を發あり武
こき石田治部少輔三成と又叛て石河

彼芳を信列本多筋北代表豊臣関
治兵衛を濃列苗木城に住て田を
中務を同国岩村の城に住をのく
又三成不屬せんとせられよりて
大檀現小山よりしく改易とりおされ
法列又本多筋の地理をつづる也
法より改易地乃をもむきくハしを
云こしまれらは秘抱なるべよ
国くまりをもびく黄金百両を給る

本芳筋又苗木岩村の城小をも
むこ親族こゝ山村喜兵
衛村平右衛門ゝ場末右衛門ゝ小笠原
靱負等と同じく乃逆徒と返
はゝ濃列よりゝ中津川駅場
等を敗北し面木塚を和睦して
うけとる故諸士と岩村の城よを
よせ変治故如の物故如の雪え
あるにより田丸中務家人福谷

三ゝ亟をして和を結しもう変よ
所ゝ東海道乃諸士遠山民部
少輔利京をせくりゝて岩村乃
城をせめたゝかひにをもく
台徳院殿信列共国より法列寄家
いくこゝをもゝやう小御を殺あり時
本曽筋の諸民ゝ遠山より源
れけゝと支改ゝ剣札をゝて
故民どもとゝ札回書ゝかゝしむ

代官き八末大臣御馬代鼎等船
料と称じ同末大井川こつもて
御馬一疋と称にされいらその御
百石駕しわひ拾列大坂よ
着御ありそのうち支改このうじ
軍忠とけぶまきその旨
大権現御感の作とかつ末氏ら
よりもて尚末城なうじ領地
壱万五百石余と称賜ま

元和五年十二月尚末よとしうを
六十四歳　法名傳公

秀友

刑部少輔
慶長十八年六歳ゆうく
台徳院殿ゆ謁しうまつる
元和六年五月十二歳にうく元服
巷跡尚末城を給ら

交貞

久太夫

家紋　丸円の字好あらそ

丸の円よ二引

遠山

加茂次郎京廉ヶ後亂

京成

生國美濃　法名大岳

濃州の知と領す

京行

相模守　生國同前　領地となれるが
織田信長をうつふ
元亀三年十二月廿八日法列に村り
をしく討死嚴六十四　法名京叔

京玄

六郎左衛門尉　生國同前

利京

勘右衛門尉　按民部少輔と号す
生國同前　領地となれるし
天正十年信長甲列より敗向のとき
利京をうしなひ一行
東照大權現の麾下に屬し奇
特を以て滅亡のち河原左兵衛尉その
かゝ英信弘也牧軍なるゝより利京
一行ハ甲列の城とまりを

同年六月明智日向守光秀信長を
弑たてまつる軍列を番乃
軍令をかへ海利京又ゑ
又駿列よりむんとをくて
江尾よきこゝ海て令
俗右清つ府小ゆさあひ自今こ
後列をゝ
大檀現よりをくゝ通列表べきの合
と弱諸し濃列よりてぬこのと

き森武蔵守去一巻信秀吉よ屬し
信列金山の城と通りのゆがゆ
英濃組北信士ハ秀吉の命にをこ
ゆびくを去一て屬し各人質を
いぐをて利京やむをとを通ぐをて
一行が姫とを列く質とし金山
北城てつひ数月をを新豊
乃秘よをゝびくひをとうぐし
元をてを領明初と角ち

参列是助よりこと

大槍現りつくまりの砦きも

上国より道まもなく

出許宮にて出一こりすと空はる

りぐ急く人貴人一行が姫と生宮

尸と利京が有りの乃ら整京村乃

河急りさまて

大槍現この事と空会及ぶれ出懐懸

のは詞とくはくせさゆふ

同十二年出久平合戦のとき森出一が

家人石黒茂義関右ふり濃列

的新城と称しむ出利京

大槍現の名と呼物りとやうせ

むしは月十七日時刻と移ばかの

城とせりたと首十又級ときつとこ

是ばら三級とりく尾列小牧

北塚りとくは西尾小右衛門女

泳八郎とりて　三遠小伝ふこ

為ニ其三 ハ感何ぞ忘れ難き彼
地を利家ニ与へ給ふ其のち
天下秀吉ニ屬し給ふ時分
ハ森右ゑ大夫よりこれ
同十八年相州小田原陣の時 利家
大樹現の麾下ニ屬し奉る陣
をつとむ
同年上総介のうち中郡村を与へ給ふ
其ゝ年上杉景勝と伝代の時

大樹現ニ屬しまつり郡列
小山ニいたりし比より紀石田治部少輔
三成上方よりひらく謀叛をかこ
りて田丸中務三成小屬し清洗
岩村の城ニ楯籠同年古渡の砦
の為城たかしゝこれを守り比ぞ
大樹現利家と ハ兼よりこれ 作よ
いとゝ的智を汝累代の本紀こう
玉人ゝこゝ汝ニ屬を新参者

ろべしとみやうにはせのぐ足後
塚をつくりてしるしとなすなり
をしく利京小山をもて戎列よりう
塙男方京をたのひ異しいうさ
をせゆきの月二万九曉明知の城を
かこむ城中より猶籠こゝ塙乃山川
左ら勅京古佐守ちゞく防戦こゝ
ごもたのひをゆうすあるこゝをして
はなはだ數小をもて利京こゝをを

て首さ三級とはきまるを式時
大檜提三成と淨徳徳のこゝをでに
はを發あるを利京さにより場こゝろ
の首ゆら二級と尾列勢面よを
と境て伯へくまるこゝ塙て
はかりぐは感たのもくいよく出
をたくし本男英法級ふとをう
こゝとあるを器村の城をせむべき
乃むかりぐはけるを 嚴金をう

勢志ゟ出こゝろよ九月十五日関原の
ゟ合戦ゟ敵軍敗北ゟ明ゟ
田丸居村の城ゟ
して勢列清ゟ
ゟ利京居村の城を
同年の冬　信ゟ
と同盟ゟ居村の城
の城ハ京ゟ
乃ゟ松平和泉守ゟ

中頃的知ハ右乃勲功ゟ
利京ゟ
その城列体ゟ
ゟ数ゟ民部少輔ゟ但
同十九日ゟ月ゟ日辛ゟ歳七十
法名自体

一行

子助　生国同前

家ハ六位左衛門尉京玄が子なり京玄
犯くのち利京これをやしなひ
子とす
天正十二年長久手合戦の時伊勢
長田を押んが為草田源十郎と
くに小牧城を固めらしむ
一行也又同年番手
同十六年の冬
大檜現れ出よ意じて一行後列
たとむくと紀甲州境峠
年とくに大宮にあふくる
方京
勘九郎　のち勘右衛門と号す
生涯同家　領地上州
寛永十九年大坂在陣の記天王寺
はた本陣北右衛門のうち
元和元年大坂在陣のとき河列
牧方北押少形

寛永十五年六月廿日死去六十四

法名玄栄

経家

道脇

紀伊大納言頼宣卿よつふ

保家

勘三郎

元和五年五月廿日死去年十七

法名宗彰

長家

後写良　後勘右衛門と号す

生国同前　紀地とふかるべ

元和五年

台徳院殿より勘しくまつる

京定

右三郎　のち十右衛門と号す

寛永元年

将軍家より賜しこまもの

京恒（げつね）　九三郎

京吉（げきち）　吉三郎

伊次（これつぐ）　米九郎　武列（ぶれつ）江戸より生る

寛永九年

将軍家より賜しこまもの

家紋　丸内九字（まるのうちのくじ）　あるいハ丸の内二引（ふたひき）

国立公文書館
National Archives of Japan

遠山

某

紀伊守　中國美濃
太田康資入道氏亡没落乃時
とよしゝ江戸の城を攻

京次

二郎右衛門　生國武蔵

天正十八年小田原没落の時江戸より

居住まて立場

東照大権現関東へ入国の時取扶て

大御番をつとむるの

台徳院殿様へつかへまつり

元和八年九月より死去七十二歳

正次

平右衛門　生國同所

台徳院殿様へつかへまつり大御番を

つとむ

寛永十三年閏月より死去六十五歳

京重

忠兵衛　生國同所

法名　清感

慶長十二年
右徳院殿より御くまつりのち
将軍家へつゝしみ申大ゝ書城
ゟ
寛永四年ゟ大坂ゟ義直卿
ゟ

京剃
平三郎　生国同前

寛永四年
将軍家より御くまつり申大ゝ書
ゟ

為庸
新八郎　生国同前
寛永三年七月
将軍家より御くまつり申大ゝ
書ゟ

家紋

九字（くじ）二引（ひきつ）

国立公文書館
National Archives of Japan

遠山

●東

丹波守　武列江戸の城小屋

直次

右東つ国　美濃

越後　上野　京　虎　よ　そ　ぐ

時丹波守こ号して之は京虎が伯母を
娶小條三郎と云京虎が長子なり此
ときに亟次彩花と名乗
天正六年三月十七日三郎と京虎と
合戦して三郎亟次より謂くいとく
歌軍今日が後とさんぎりを退
方とうなひぬるとも我ならば
此下に戦死もべし亟次も城中に
居て日ごの書あるを歌の手うしい

城中に来かゝれ亟次これを聞く
ものはち城より出て三郎が家室
をびよ長女五人を殺し城中に
火をはなちて自害す　法名浄連

亟吉
彩次郎　母は宮良兵衛と云
生国お横
小條氏亟吉はなゝむ

天正十八年小田原までに没落して
氏亨弾山のぐり亨吉をまつ
さこびゆんたまりをと
しく
東照大権現かさげまくを麿下よ
渇しくまつるべきのよ
台命とうしふさりといへごを
信代ろよるとく高弾よさる
ぶ麿きの望を云ふてび

当命ひつとく氏亨を投山りとを
ちこやうに渇くはくまる
麿し書をば心り渇うせく
いぼくにをとく麿しとのれ定り
直吉　作をとけ渇り書を
相模国中郡白根郷よをきその
とりむさ試云ふ代ふこびけ
うを御年をとる申り見年多
泳八郎正紙が添状ひを

天正十九年
大檀那と為号し領地をとる
文禄元年朝鮮陣のとき肥前国
名護屋より
台徳院殿と為し
慶長五年関原出陣の供をせ
らる
同十六年十月廿七日より病を四十九歳
法名宗吟

京繩
新次郎　坂宮長清尉と号す
生国同前
慶長八年
台徳院殿より
大坂安度の出陣供奉
元和九年
将軍家に

家憲

平三郎　母八良右衛尉之娘

生國武蔵

寛永八年はじめて

将軍家へ参しまつる

同十三年より法くまつる

家紋　九字

遠山

利仁十代壹山京胡ゞ後裔

直家

丹波守　生國武蔵

永禄六年玉府壹よりて討死

法名大農宗岑

寺号吉祥

秀重

河村兵部大輔

河村孫次郎が家より入て新おこなう

元和四年七月十日死す　法名

関家正鐵

直定

はじめ河村作兵衛と称し後

壱山六右衛門尉こと河村ことり祖父の

氏を復す

小源氏重より

天正十二年四月十一日氏重より重

の字をさづけ重定と称す

同十九年六月十日

東照大権現より拝謁す

文禄元年豹軒のとき肥前国

名護屋よりこゝにまいる

慶長六年奥州陣ハこゝ小山より
信濃へ
同年
台徳院殿ハ越後ヨリ信州真田陣ハ小諸
慶長十九年大坂出陣ハこゝ城列
伏見ハ御城番ハ
ハ出陣ハ色々ハ
信州ハ番ハものハ十人

御供ハ
負ハ
直清

慶一　後理兵衛こゝ
生国武蔵
文禄三年
大御現ハ御ハ
関原ハ大坂ハ
陣ハ信濃ハ

台徳院殿より仕へ奉まつる

寛永十年五月廿七歳

助直

孫一郎　生國後河

寛永三年後河大納言忠長つ

つしふ

同十一年

将軍家小姓召出され奉つ

直政

半助

直信

求助

家紋

二引九字

国立公文書館
National Archives of Japan

遠山

安吉

新八郎　本國英濃の
廣忠卿より
ときき林右衛門を御きと尊を拘
高野山のぐるを大徳院より礼
をおくむ此佐牌の書より林右衛門

壹山彩八郎　南人の名を志るす
好
東照大権現より下くしまりし名を
隼人正と称ふ
文禄二年九月朔日六十七歳にて
死す

安政
平大史　生国三河

大権現より仕へ奉り
慶長五年三月廿日江戸にて
死す　五十四歳

安則
久四郎　生国三河
大権現より仕へ奉る

安次
久四郎　生国武蔵

白川院殿
為軍家よつくしたてまつる

安忠
久四郎

安重
平大夫　壱列濱雲より出る
文安六年六月十八日

白川院殿よつくしたてまつる

家紋　丸内二引

国立公文書館
National Archives of Japan

遠山

京家

右馬允　生國武蔵　法名宗也

小條氏政同氏也之法

京政

小右衛門　生國同前

天正十八年
秀照大権現ゝ成こゝくまつる
賀茂なゝびよ大坂出陣の後
とつかむ
元和七年より死を四十八歳

京次
小右衛門　生国同前
慶長十一年

右法院殿ゝ成こゝくまつる
同十九年大坂出陣のゝち伏見
御城番ゝ成とつかむ
寛永元年
将軍家ゝ成こゝくまつる
同十一年四十三歳ゝて死を

京直
右衛門　生国同前

寛永十三年
将軍家小姓くゝまり
家紋　丸内二引

国立公文書館
National Archives of Japan

遠山

利仁

鎮守府将軍

叙用

従宮寮以

右信

加賀守　従五位下

重光

真壁守

臭正

澄ロ

正重

右京亮

従五位下

京道

加賀守

京清

加茂次

京廉

加茂次

京朝

壱山の元祖　右京亮

代間中絶

直家

丹波守

小條氏康より佐々木家老となり

永禄七年正月七日星見義高ニ国府

乃嘉[illegible]戦死ス

女子

左田彩六郎康資ノ妻

重政

左田新六郎

女子

英勝院

資為

壹山因幡守

元和九年正月八日ほうろく

扨軍家より為褒賞

寛永七年十二月朱印状を以下より叡慮

実ハ吉田氏こゝろこいへを伯母なるゝび

り重政が母みかを山氏こゝをかゝゞ

ゆへより吉田を山と称せ

これ英儒院の意によりてなり

家紋　九字　二引両

西山

昌永

彩四郎　生国甲斐

武田信虎をすび信玄ふつふ

天正元年より死せて

法名若狭

昌次

八兵衛　生国同前

信玄より後義信に属し

永禄四年信州川中島よりしく

京虎と信玄とよび義信と射陣

のとき昌次鉄炮を発して敵切

とりげまし疵をかうむる義信逝去

のはかりびに信玄をよび勝頼

に

仕へ鉄炮をにぎりて年来

天正十年織田氏滅亡しくのち

東照大権現甲州に入国あるに此ごろ

かさね鉄炮をにぎりさぶらひ

つかまつる

同十二年尾州小牧陣の時昌次病

ふかくして伝年たるるにいたり

嫡子昌寛伝年しに去久年にして

て戦死

大檜現関東に入国の時武列高麗郡
根岸村小とひしく采地を給ふ
昌次壮年より疱瘡を患ひ
不行学れども　台命受け
度々奥州城西の丸留守の
出番をつとむ　七十七歳にて死
法名京正

昌寛

昌勝

源七郎
長久年戦場よりひしく討死

八長湯　生国同前
大檜現
台徳院殿よりたくさんなり
元和三年
将軍家不行ゆくさまり
小十人の組頭となる

寛永二年に膳を行ひ
同六年 食邑をくはへ
同十七年七月十四日 五十九歳にて
死せり 法名 秀泉

昌親

八兵衛 生母同前
昌倫が養子となり 実八兵衛
昌喜がゆゑなり

寛次

新四郎
大橋沢右衛門
寛宗

太右衛門 生母甲斐
元和九年

初軍家よりくまりゐ
寛永十七年十一月領地をあたり
昌倫が巻二冊をはぐ

将軍家より賜はり
同年 此上洛の供奉し此切米を
賜ふ
寛永三年 此入洛の供奉
同六年九月小十人の組頭となる
同年十月食禄をくはへらる
同十一年 此入洛此供奉を仕る

昌春
又郎三郎

寛明
次郎八郎 生国武蔵

昌近
千助 生国同前

某
右三郎 生国同前

某
源助 生国同前

女子

家紋丸曜（ようよう）

副紋嬉酸草（うれたぐさ）

国立公文書館
National Archives of Japan

西山

本を領郡と称ス武田信玄の命
ずゝ領郡とあゝ云西山と
号て昌義甲州西山の方を領つ
ゝゆへなり

昌義

宗右衛門　生國甲斐

武田信虎より　四十一歳にて死去
法名乗喜

昌俊

十右衛門　生国同前
信玄をもつて諸頼より相見ル使
書をとらせむ
天正十年ゟ召れ
東照大権現ゟ仕へ召出ル

同十二年尾列小牧出久手ゟ使者と
仕りて凱旋の時　上使にて越中
の国迄作〻問義助がもとにたもつく
ゟ所法方へのれつをとり海ゟ
変出十九年七十七歳ゟ死去
法名永林

昌俊

十右衛門　生国同前

大樓規
右徳院殿
初軍家よりつくさせ給ふ
寛永三年六十五歳にて死去
法名宗永

昌信
清兵衛　生母同前
右徳院殿

初軍家より清くさせ給ふ
寛永二年三十九歳にて死去
法名源去

昌久
清兵衛　生母武蔵
寛永十七年
初軍家より清くさせ給ふ

昌繩

右郎兵衛　生國甲斐

あるべく

大権現様御代小田原奥列

関原為北陣より御使者

蒙仰命とかゝゆる越後

守殿御輝元様御代

元和元年松平忠直卿御

大坂出陣のぞむ時天王寺

をしく味方敗北といへども昌繩も

手傷を蒙りぞ明陣の時御輝

元様敗軍の兵穿鑿を昌繩を

もつて召出され御授とたのもうされて

白洲院殿

拾軍勢より御くゝり申

昌門

右兵衛

昌姓

久右衛門　生国武蔵

寛永十六年ゟ召れ

将軍家ゟ下つくらくまり

家紋　丸曜　副紋鳴鼓草

後藤

寶元

彰元　生國を以
世に秀吉のいとこにあたるゆえ
世列濱雲よりたもむくそれより
東照大權現より仕へ奉り

正勝

又十郎　久市と号す　生母同前

崇源院殿出嫁礼のとき供奉せしむ

その後

大権現よりたびたび召出され

乃御書をたまはるもの

享年十一歳にして病死

正成

正冬

弥右衛門　生母武蔵

右浦院殿よりたびたび召出

大権現よりたびたび御書

弟右衛門　生母同前

正次

六右衛門　生母同上

文長十一年
右徳院殿より
元和元年
将軍家より清河
将軍家より清河

正俊

清九郎　生国武蔵
寛永十三年
将軍家より相渡し同十六年より
家紋　丸の内枝柏

国立公文書館
National Archives of Japan

●吉久

基兵衛　生國和模

右獄院殿

初軍家よりくらくら御召抱

江戸にてもひくらみ十二歳にて

病死

久次

甚兵衛　生国武蔵

家紋　上蔵の丸

国立公文書館
National Archives of Japan

後藤

本は源姓為津氏なるを按ずるに
たゞ按藤氏とのみ出でゝ下る
くりまこの事を考へるに

玄德

傳称為津患葦が子也良法名日彰
が弟なりはゞ考へる

享禄年中十九歳にて義元を
お学問のため関東へとむき発足
そのこと今切の渡しにて
私捨て書簡をほうげしてで
ありて後河へ入る時今川家
氏親より出仕懇ゆえ敵名乗
と申し長浦とまねくゆゑ
還俗して氏親へ奉仕相列
小田原へ入こと小原大夫

氏親より奉仕の時数度の軍功あり
ゆへ氏綱相模の国へ入
食邑をあたふ

慶辨

武列浅草梅園院
天文元年後河へ入こむまり
慶長十四年又月十三日七十八歳にて
死す

永久

葉

鴻津右衛門尉
小田原小除家より江戸豊山丹波
がむすめと永久ゑ水が書かな
まに江戸より住を
玉尾と小除と玉潟にて
合戦ありて死

鴻津左水
小除家より江戸豊山より
江戸より住を小田原滅亡のち
後河ゑ死を　法名五半

葉

鴻津右衛大夫
豊山より江戸ゑ住を
小田原滅亡の時後河ゑ

女ハ豊山丹波守が女

死す　法名右京亮

菜

為津左衛門尉

天文四年相列小田原より出る

小條氏改りつゝ

天正十七年氏政先秀吉の兵とおれ列

より發せる事を受て籠城れ用意こと

してを急り要害とゝまへたるつ

りおかせる根府川山の石垣と

けりたりんとたるつ山下の要害

菅沼ちうべとゝいふ氏政見

ときく大よいうをたるつと自殺せ

むし時たるつみ十五歳なる　法名

宗玄

菜

為津隼人　生國同前

小條氏政より小田原滅亡の後

武列江戸よりをしく死す

忠正

母夜源左衛門　生國同前

又家の時後河乃母夜叉の妹が養子と

なり尼より鴻津氏をあらそうて

代々後藤氏となる母夜の系譜く

はしかなし

慶長十九年十月廿六日ゑ十八歳にて

死す　法名玄賢

某

女子

蓮意坊　共言家　お列と任す

忠直

長八郎

天正十二年豊臣秀松より

十二家より

石徳院殿下つくへ[illegible]

下列す

慶長五年黒田陣より修羽陣中
御近侍とはかられざる事を感じ
たがしめをにしまもれ列衆を
もしく領地をくまふ
寛永八年二十歳ふく記を　法名
光心

吉勝

市右衛門
文禄二年武列器より生る
寛長十年太閤が巷跡をつき領地
をくふり大坂夏の陣より修羽に
寛永十年
将軍家より上総の国大多喜領今賀
村源兵衛村をひく采地をくく
給ふ四領ふ新くふ百石を領
知ふ

男子四人
女子六人

久利

生る

寛永九年武州江戸より生る

十歳ゟ〳〵

将軍家より拝領し〳〵書付る

家紋　巴圓の内白十文字　増津が家の紋なり

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan